

# 高校入試特別講座 国語Ⅰ 第4回

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小説家とは何か、と質問されたとき、僕はだいたいいつもこう答えることにしている。「小説家とは、多くを観察し、わずかしかな断を下さないことを生業とする人間です」と。なぜ小説家は多くを観察しなくてはならないのか？ 多くの正しい観察のないところに多くの正しい描写はありえないからだ——□ I (1) 奄美の黒兎の観察を通してポウリング・ボールの描写をすることになるとしても、なぜ小説家はわずかしかな断を下さないのか？ ① 最終的な判断を下すのは常に読者であって、作者ではないからだ。小説家の役割は、下すべき判断をもっとも魅惑的なかたちにして読者にそっと(べつに暴力的にでもいいのだけど)手渡すことにある。

おそらくご存じだとは思いますが、小説家が(面倒がって、あるいは単に自己 □ X のために)その権利を読者に委ねることなく、自分であれこれのごとの判断を下し始めると、小説はまずつまらなくなる。深みがなくなり、言葉が自然な輝きを失い、物語がうまく動かなくなる。

良き物語を作るために小説家がなすべきことは、ごく簡単に言ってしまうと、結論を用意することではなく、仮説をただ丹念に積み重ねていくことだ。我々はそれらの仮説を、まるで眠っている猫を手にとるときのように、そっと持ち上げて運び(僕は「仮説」という言葉を使うたびに、いつもぐっすり眠り込んでいる猫たちの姿を思い浮かべる。温かく柔らかく湿った、意識のない猫)、物語というささやかな広場の真ん中に、ひとつまたひとつと積み上げていく。どれくらい有効に正しく猫Ⅱ仮説を選びとり、どれくらい自然に巧

みにそれを積み上げていけるか、それが小説家の力量になる。

読者はその仮説の集積を——もちろんその物語を気に入ればというのだが——自分の中にとりあえず □ (2) インテイクし、自分の(3) オーダーに従ってもう一度個人的にわかりやすいかたちに並べ替える。その作業はほとんどの場合、自動的、ほぼ無意識のうちにおこなわれる。僕が言う「判断」とは、つまりその個人的な並べ替え作業のことだ。それは別の言い方をするなら、精神の組成パターンの組み替えのサンプルでもある。そしてそのサンプリング作業を通じて、読者は生きるという行為に含まれる動性 □ (4) ダイナミズムを、我がことのようにリアルに「体験」することになる。どうしてわざわざそんなことをしなくてはならないのか？ 「精神の組成パターン」を実際に組み替えることなんて、人生の中で何度でもできることはないからだ。 □ II 我々は(5) フィクションを通して、まず試験的に仮想的に、そのようなサンプリングをおこなう必要がある。

つまり小説というものは、使用されている(6) マテリアルをひとつひとつ取り上げれば、虚構Ⅱ疑似であるけれど、それが従う個人的オーダーと、並べ替えの作業(7) プロセスについては、紛れもなく実際のなものである(べきである)。我々小説家がどこまでも虚構にこだわるのは、多くの局面において、おそらくは虚構の中でしか仮説を有効に(8) コンバクトに積み上げることができないと知っているからだ。フィクションという装置に精通することによってのみ、我々は(9) 猫たちをぐっすり深く眠らせておくことができる。

ときどき年若い読者から長い手紙をもらう。彼らの多くは真剣に僕に向かって質問する。「□ (10) どうしてあなたに、私の考えていることがそんなにありありと正確に理解できるのですか？ こんなに年齢も離れているし、これまで生きてきた体験もぜんぜん違うはずなのに」と。

僕は答える。「それは、僕があなたの考えていることを正確に理解しているからではありません。僕はあなたのことを知りませんし、ですから当然ながら、あなたが何を考えているかだってわかりませ

ん。Ⅲ 自分の気持ちを理解してもらえたと感じたとしたら、それはあなたが僕の物語を、自分の中に有効に取り入れることができたからです」と。

仮説の行方を決めるのは読者であり、作者ではない。物語とは風なのだ。④ 揺らされるものがあって、初めて風は目に見えるものになる。

「自分とは何か？」という問いかけは、小説家にとっては——というか少なくとも僕にとっては——ほとんど意味を持たない。それは小説家にとってあまりにも Y な問いかけだからだ。我々はその「自分とは何か？」という問いかけを、別の総合的なかたち（つまり物語のかたち）に置き換えていくことを日常の仕事にしている。作業はきわめて自然に、本能的になされるので、問いそのものについてあえて考える必要もないし、考えてもほとんど何の役にも立たない。むしろ邪魔になる。もし「自分とは何か？」と長期間にわたって真剣に考え込む作家がいたとしたら、彼／彼女は本来的な作家ではない。あるいは彼／彼女は何冊かの優れた小説を書くかもしれない。しかし本来的な意味での小説家ではない。僕はそう考える。

しばらく前にインターネットのメールで、次のような読者からの質問を受け取った。正確な文章は思い出せないのですが、おおまかな筋を書く。

先日就職試験を受けたのですが、そこで「原稿用紙四枚以内（村上註：だっと思つた）で、自分自身について説明しなさい」という問題が出ました。僕はとても原稿用紙四枚で自分自身を説明することなんてできませんでした。そんなことできつこないですよ。もしそんな問題を出されたら、村上さんはどうしますか？ プロの作家にはそういうこともできるのでしょ

か？

それについての僕の答えはこういうものだ。

こんには。原稿用紙四枚以内で自分自身を説明するのはほとんど不可能に近いですね。おっしゃるとおりです。それはどちらかというの意味のない設問のように僕には思えます。Ⅳ、自分自身について書くのは不可能であっても、たとえば牡蠣フライについて原稿用紙四枚以内で書くことは可能ですよね。だったら牡蠣フライについて書かれてみればいかがでしょう。あなたが牡蠣フライについて書くことで、そこにはあなたと牡蠣フライとのあいだの Z 関係や距離感が、自動的に表現されることになります。それはすなわち、突き詰めていけば、あなた自身について書くことでもあります。それが僕のいわゆる「牡蠣フライ理論」です。今度自分自身について書けといわれたら、ために牡蠣フライについて書いてみてください。もちろん牡蠣フライじゃなくてもいいんです。メンチカツでも、海老コロッケでもかまいません。(9) トヨタ・カローラでも(10) 青山通りでも(11) レオナルド・ディカプリオでも、なんでもいいんです。とりあえず、僕が牡蠣フライが好きなので、そうしただけです。健闘を祈ります。

そう、小説家とは世界中の牡蠣フライについて、どこまでも詳細に書きつづける人間のことである。自分とは何ぞや？ そう思うまでもなく(そんなことを考えている暇もなく)、僕は牡蠣フライやメンチカツや海老コロッケについて文章を書き続ける。そしてそれらの事象・事物と自分自身とのあいだに存在する距離や方向を、データとして積み重ねていく。多くを観察し、わずかしら判断を下さない。それが僕の言う「仮説」のおおよその意味だ。そしてそれらの仮説が——積み重ねられた猫たちが——発熱して、そうすることで

物語というヴィークル(乗り物)が自然に動き始めるわけだ。

(注) (1) 奄美の黒鬼：奄美大島、徳之島に生息するウサギの種。絶滅危惧種。  
(村上春樹「村上春樹 雑文集」による)

- (2) インテイク：撰取、取り込むこと。  
(3) オーダー：順序、秩序、命令、指示。  
(4) ダイナミズム：力強さ、追力。  
(5) フィクション：作り事、虚構、創作された架空の物語。  
(6) マテリアル：材料、原料、素材。  
(7) プロセス：過程、経過、手順。  
(8) コンパクト：小型で中身が充実しているさま。  
(9) トヨタ・カローラ：トヨタ自動車が生産・販売している乗用車のブランド、およびその車名。  
(10) 青山通り：国道246号のうち、東京都千代田区から同渋谷区までの区間の通称。
- 問一 空欄ⅠⅡⅢⅣに補うのに最もふさわしい語の組み合わせを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。
- ア Ⅰ だから Ⅱ そこで Ⅲ ただ Ⅳ つまり  
イ Ⅰ たとえ Ⅱ だから Ⅲ もし Ⅳ ただ  
ウ Ⅰ あるいは Ⅱ しかし Ⅲ あるいは Ⅳ そして  
エ Ⅰ たとえ Ⅱ そして Ⅲ たとえ Ⅳ しかし  
オ Ⅰ もし Ⅱ なぜなら Ⅲ また Ⅳ ところが
- 問二 空欄ⅠⅡⅢⅣに補うのに最もふさわしい語の組み合わせを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。
- ア X 欺瞞 Y 鮮明 Z 信頼  
イ X 批判 Y 克明 Z 従属  
ウ X 顕示 Y 自明 Z 相関  
エ X 暗示 Y 明快 Z 因果  
オ X 嫌悪 Y 著名 Z 主客

カ X 肯定 Y 難解 Z 友好

問三 傍線部①「最終的な判断を下すのは常に読者」とあるが、この「判断」を通して「読者」の身に起こることはどういふことか。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 生きるという行為に含まれる動性Ⅱダイナミズムをリアルに体験すること。  
イ 仮説をインテイクし、作者のオーダーに従って個人的なかたちと並べ替えること。  
ウ 魅力的なかたちにされた判断を、そつと、または暴力的に委ねられること。  
エ フィクションを通して、小説家が行なっている物語の創作活動を追体験すること。  
オ 小説を読むことで、作者に自分の気持ちを理解してもらえたと実感すること。
- 問四 傍線部③「どうしてあなたに、私の考えていることがそんなにある」とありと正確に理解できるのですか？」に対して、筆者はどう述べているか。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。
- ア それは筆者の用意した物語の中で質問者が取り上げた仮説の並べ替え方が、筆者の想定した並べ方と一致したということである。  
イ それは筆者が用意した物語から、質問者が仮説を効果的に取り上げ、個人的な並べ替えを行なうことができたということである。  
ウ それは筆者が用意した物語の中の仮説を、質問者が個人的オーダーに従って、別物に作り変えてしまったということである。  
エ それは筆者の観察が生み出した、多くの人々に共通する「精神の組成パターン」を、質問者が正確に読み取ったということである。

オ それは筆者が物語の中に用意した「自分とは何か?」という問いに、質問者が有効に答えることができたということである。

問五 傍線部④「揺らされるものがあって、初めて風は目に見えるものになる」とは、どういうことか。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 読者が物語を読むことを通じて、初めて作者の仮説が積み上げられ始め、姿を現すようになるということ。

イ 作者の書いた物語の中の仮説の行方は、読者に読まれることによって、初めて定まってくるということ。

ウ 読者が物語を自分の中に上手に取り込めるかどうかで、作者が用意した仮説の正誤が決定するということ。

エ 作者が考える仮説の行方と、読者が読み取った仮説の行方は、それぞれ異なる姿を現すことがあるということ。

オ 作者の用意した物語の結末は、それを読者がどのように読むのかということに委ねられているということ。

問六 傍線部⑤「ほとんど意味を持たない」とはどういうことか。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「自分とは何か」という問いは、小説家にとって日々自問してみたいとしても、答えを出すことが難しい問いだということ。

イ 「自分とは何か」という問いは、小説家にとってすぐに答えを出せるようなものではなく、時間をかけて熟考すべき問いだということ。

ウ 「自分とは何か」という問いは、小説家にとって本来的に答えを求めべきではない、創作において危険な問いであるということ。

エ 「自分とは何か」という問いは、小説家にとっては日常的に物語に置き換えているものであって、あえて考える必要はないということ。

オ 「自分とは何か」という問いは、小説家にとって自ら答えを

出すものではなく、読者によって解き明かされるべきものだと  
いうこと。

問七 本文において「牡蠣フライ」のたとえを用いて述べられていることはどのようなことか。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分自身を説明するのは不可能だが、他の事象や事物の中に自身を表現するのは、すぐれた小説家にとってはたやすいということ。

イ 自分自身を説明するのは困難だが、他の事象や事物と自分との間の関係や距離を書くことで、「物語」が動き始めるということ。

ウ 自分自身を説明するのは可能だが、他の事象や事物について書く方が、自分とは何かを理解するためには有効であるということ。

エ 自分自身を説明するのはたやすいが、あまり意味のない行為であるため、他の事象や事物について書く方が有益であるということ。

オ 自分自身を説明するのは難しいが、他の事象や事物について書くことで、それらと自分との間の距離や方向を表現できると  
いうこと。

問八 本文の内容に合致するものを、次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者が考える本来的な小説家とは、正しい描写を求めて多くを観察し、多くを判断することを日常的な生業とする人である。

イ 自分が何者であるのかと長期にわたって真剣に考え抜いた作家こそが、優れた物語を生み出す力量を手にすることができる。

ウ 小説家が面倒に思っ、自分の作り出す物語の行方に判断を  
与えることをやめてしまうと、小説はつまらなくなってしまう。

エ フィクションの中に眠っている「猫」、すなわち「読者」を  
上手に目覚めさせられるかどうかは、小説家の力量にかかって

いる。

オ小説家が虚構にこだわるのは、現実では果たしがたい「精神の組成パターン」の組み替えの疑似体験を可能とするためである。

問九 傍線部②「猫たちをぐつすり」と深く眠らせておくこと」とは、どのようなことのとえか。その答えとしてふさわしい箇所を、本文中から三十一字で抜き出し、初めの五字を答えなさい(句読点や記号も一字に数えること)。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これは私が小学三四年のころの話である。

私の家からその小学校へ通う道筋にあたって、常泉寺という、かなり大きな、古い寺があった。非常に奥ゆきの深い寺で、その正門から奥の門まで約(1)三四町ほどの間、石甃が長々と続いていた。そしてその石甃の両側には、それに沿うて、かなり広い空地が、往来から茨垣に仕切られながら、細長く横たわっていた。その空地は子供たちの好い遊び場になっていた。そしてその空地で遊んでいる分には、誰にも叱られなかったが、若し私たちがその奥の門から更に寺の境内に侵入して、其処のいつも箒目の見えるほど綺麗に掃除されている松の木の周りや、鐘楼の中、墓地の間などを荒し廻っていると、寺の爺にでも見つかるものなら、私たちはたちまち追い出されてしまうのだ。②疳癪らしかった爺の一人なんぞは、手にしていた竹箒を私たちに投げつけることさえあった。だが、そうなるは一層その寺の境内や墓地を荒すことが面白いことのように思われ、私たちは爺に見つかるのを恐れながら、それでも決してその中へ侵入することを止めなかった。その寺には爺が二人いた。一人は正門の横で線香や、櫛などを売って居り、もう一人はよく竹箒を手にして境内や墓地の中を掃除していた。私たちは彼等を顔色から「赤鬼」「青鬼」と呼んでいた。

たしか秋の学期のはじまった最初の日だったと思う。学校の帰り

途、五六人でその夏の思い出話などをしながら一しよに来ると、そのうちの一人が数日前に常泉寺の裏を抜ける、まだ誰も知らなかった抜け道を見つけたといつて得意そうに話した。①そこで私たちはすぐそのまま、一人の異議もなく、その抜け道を通ってみることにした。

そのころ常泉寺の裏手にあたって、小さな尼寺があった。円通庵とか云った。丁度その尼寺の筋向うに、ちよつと通り抜けられそうな路地があったが、その中へ私たちの小案内者が、**A**得意そうに入つて行くので、私たちも面白くことでもするようにその汚い路地の中へ入つて行つた。最初のうちは何んだかゴミゴミした汚らしい小家の台所の前などを右へ折れたり左へ折れたりしていったが、そのうち半ばこわれかかった一つの(4)柴折戸のあるのを先頭のものごと押し中へはいつて行つた。と、いまままで何か言ひあつていたものたちが、そのとき急に**B**話しやめた。不意に意外な場所に出たものと見える。やつと自分の番になって、その中へはいつて見ると、私たちの目の前には、いまにも崩れそうな小さな溝を隔てて、目のあらい竹垣の向うに、まだ見たこともないような怪奇な庭が横たわっていた。そこには無気味に感じられる恰好の巖石がそば立ち、緑青いろをした古い池があり、その池の端には松の木ばかりが何本も煙のように這いまわっていた。そしてそれが常泉寺の奥の院の庭であるのを知つた時、私たちは一層驚かすにはいられなかった。……それから②私たちは急にひっそりとなつて、その崩れ落ちそうな溝づたいに一列にならんで歩き出したが、その道のもう一方の側はどうなつていたのか今はつきり思い出せない。そこまで来てしまつと、どつちを向いてももう殆んどさっきの人家らしいものが目に入らなかつたようだが、ことによると私たちのまわりには私たちよりも丈高く雑草が生い茂つていたのか知れぬ。そう云えばそこいらが一面の薄だったような気がする。

私たちは何時の間にかとんでもない場所へ来てしまったような不安な気持ちになって、お互に無言のまま、おっかなびっくりそんな場

所を歩き続けて行ったが、そのうち再び驚かされたのは、そんな寺の裏なんぞの、恐らく四方から墓ばかりに取り囲まれているであろうようなところに、一軒ぼつんと小さな家が見え始めたことだった。さっきの雑草もその小家のあたりだけは綺麗に取除かれ、その代りそこら一面に、その小家を殆んど埋めるくらいにして、黄や白だのの見知らぬ花が美しく咲きみだれていた。その見なれない小家の前を私たちが C 通り抜けようとしたとき、その家のなかの様子子は少しも見えなかつたけれど、私はふとその閉め切った障子の奥に誰かが居るような気配を感じ、その瞬間私にはその人が何んだか私の母をもうすこし若くしたくらいの年恰好の美しい婦人であるように思われてならないのだった。(が、今考えてみると、そういうようなすべては、その小家を埋めるようにしていた、それらの黄だの白だのの見知らぬ花々の微妙な影響に過ぎなかつたのかも知れない。……)

その小家のあたりから、道は両側とも竹垣に挟まれながら、真直(まっすぐ)に寺の(5)庫裡の方に通じているらしかった。その竹垣の一方はまださつきから見え隠れしている庭の続きであつたが、もう一方はいつのまにか大小さまざまな墓の立ち並んだ墓地になつていた。私たちはその墓地の方へ抜け出ようとして、その竹垣を乗り越すのにいろいろな苦心をした。

私たちがそんな寺の裏の、いかにも秘密に充ちたような抜け道(?)をたつた一遍きりしか通つたことのないのは、その時まだその竹垣をみんな乗り越してしまわないうちに、寺の爺たちに見つかつて、X からだ。その時くらい爺たちが私たちに向つて腹を立てたことは今までもなかつた。爺やたちは二人がかりで、何処までも私たちを追いかけて来た。——そのときは私たちも何んとか興奮して、墓と墓の間をまるで栗鼠のように逃げ廻りながら、口々に叫んでいた。

「赤鬼やあい……青鬼やあい……」

(堀辰雄「墓畔の家」による)

75

70

65

60

55

(注) (1) 三四町：一町は約109メートル。

(2) 疳癖：激しやすく、怒りっぽい性質。

(3) 櫛：白い花を咲かせる常緑樹で、仏事のお供え物などとして使われる。

(4) 柴折戸：折った木や竹の小枝を組んで作った簡素な押し開き戸。

(5) 庫裡：住職やその家族などの住むところ。

問一 空欄 A、C に補うのに最もふさわしい語を、次の選択肢の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A ずんずん    イ ばたばた    ウ ばったりと

エ しっかりと    オ こっそり

問二 空欄 X に補うのに最もふさわしい語句を、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

A 顔に泥を塗られた    イ 肩の荷が下りた

ウ 心配をかけた    エ 散々な目に遭つた

オ 後ろ髪を引かれた

問三 傍線部①「そこで私たちはすぐそのまま、一人の異議もなく、その抜け道を通つてみることにした」とあるが、これはなぜか。

その理由として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

A 爺たちが奥行き深い寺である常泉寺の裏の抜け道を誇りに思つていたことを知つた子どもたちは、敵である爺を出し抜く良い機会だと思つたから。

イ 普段から寺の境内に侵入して爺に追いかけることを恐れながらも面白がついていた子どもたちにとって、より一層好奇心をくすぐられる事柄に思えたから。

ウ 子どもたちは空き地での遊びに飽き、爺との追いかけることにもうんざりして、更なるスリルを求めてより危ない遊びをしようと決心したから。

エ 学校から一緒に帰つていた子どもたちの一人が、あまりにも得意げに常泉寺の裏庭の美しさを語るのので、それを聞いた皆が

感化されてしまったから。

オ 秋の学期のはじまった最初の日で、子どもたちは夏の思い出話に夢中になって気持ちが大きくなり、普段は恐れている爺を怒らせてみようと思ったから。

問四 傍線部②「私たちは急にひっそりとなって」とあるが、この箇所の子どもの様子を説明したものとして、最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 墓に取り囲まれていた一軒の小さな家を発見し、超自然の存在を感じとって驚いている様子。

イ 無気味で怪奇な庭が目の前に現れたが、その庭が常泉寺の奥の院の庭だったことに安心している様子。

ウ どうして先に入った者たちが突然黙ったのか理由がわからず、得体のしれない恐怖を感じている様子。

エ 目の前の無気味で怪奇な庭に驚き、思いがけない場所へ来てしまったことに不安を感じている様子。

オ 気味の悪い庭が目の前に広がったことで、爺たちとの苦い記憶を思い出し、焦りを感じている様子。

問五 本文について、次の問いに答えなさい。

A 本文の表現の特徴として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」の視点から周囲の子どもたちや景色が客観的に描かれており、子どもたちの興奮とその様子を見守る「私」の冷静な心境が明確に対比されている。

イ 「小学三四年のころ」「五六人」や「うだったような気もする」などの曖昧な表現を多用することで、子どもたちが見た怪しげで無気味な景色の衝撃の大きさが強調されている。

ウ 「私」の少年時代の体験を回想する文章の中で、「不意に意外な場所に出たものと見える」という箇所は、当時の「私」の視点から表現されることで、臨場感が与えられている。

エ 登場人物たちの心情描写を抑えて「黄や白だのの見知らぬ

花が美しく咲きみだれていた」といった情景描写を多用することで、常泉寺周辺の景色の美しさが鮮やかに描写されている。

B 「私」の少年時代の心の動きの説明として、最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」の家から学校に向かう道筋にある常泉寺で遊ぶ場面では、寺の境内を荒らしまわって爺に怒られて反省はしたが、その後爺に報復しようという荒んだ心境になっている。

イ 誰も知らない抜け道を通る場面ではまだ見ぬ世界に恐怖を感じていたが、徐々にその景色に慣れていって気持ちが大きくなり、好奇心に満ち溢れた心境になっている。

ウ 墓に囲まれている小さな家を見た時に「美しい婦人」がいるように思った場面では、怪しげな庭に対する不安を抱いていたが、その後その小屋の周囲の美しい花に影響され、亡くなった母を思い出し感傷的な心境になっている。

エ 興味本位で怪しげな路地に入ってしまったが、墓地へ抜け出ようとしている場面では、竹垣を乗り越えながら無鉄砲な行動を後悔する心境になっている。

オ 不安を感じながら見通しのつかない道を歩いていたが、「赤鬼やあい……」と叫ぶ場面では、爺たちに追いかけられるという日常に戻り、その不安から解放されて興奮した心境になっている。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一休和尚は、いとけなき時より、常の人には①「かはり給ひて、利（利）根發明なりけるとかや。師の坊をば養叟和尚と申ける。こびたる（こびたる）であったとか。僧匠の坊さんは養叟和尚と言われた。学識のある（学識のある）旦那ありて、常に來りて、和尚に②「参学などし侍りては、一休の（一休の）發明なるを心地よく思ひて、③「折々はたはぶれをいひて、問答な（問答な）てちらと見、内へはしり入りて、④③「へぎに書付立られけるは、

此寺の内へかわのたぐひ、かたくきんぜいなり。若かわの物入（若かわの物入）る時は、其身にかならずばあたるべし（その身に）とかきて置れける。かの旦那（これ）を見て、「皮のたぐひにばちあたる（その旦那はこれを見ず）ならば、⑤「此お寺の太鼓は何とし給ふぞ」と申ける。一休聞給ひ、  
「さればとよ、夜昼三度づつばちあたる間、其方へも太鼓のばちを（あなたへも）あて申さん、皮のはかまきられけるほどに」と⑥「おどけられけり。」  
とおどけなされた。

〔注〕 (1) 旦那……ここでは檀家の意。「檀那」も同じ人物を指す。  
(2) 参学……ここでは禪の教えを学ぶこと。  
(3) へぎ……杉やひのきを薄く削って作られた板。  
(4) 一休はなし」による。  
(5) 此お寺の太鼓は何とし給ふぞ」と申ける。一休はお聞きにならぬので、この寺の唐太鼓は何となくいましてしょうかと申された。  
(6) おどけられけり。あなたへもあて申さん、皮のはかまきられけるほどに」とおどけられけり。

問一 傍線部①「かはり」は現代仮名づかいでは「かわり」となる。これにならって次の各文の傍線部を、現代仮名づかいに改めなさい。

- 1 わざはひをも招くは、ただこの慢心なり。
- 2 やうやうしろくなりゆく、山ぎはすこしあかりて、

問二 傍線部②「發明」の本文中での意味として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

- ア なんでも作り出すこと
- イ 仏道に精通していること
- ウ 元気であかるいこと
- エ けなげなこと
- オ かしこいこと

問三 傍線部③「折々はたはぶれをいひ」とあるが、この動作の主語として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一休
- イ 常の人
- ウ 養叟和尚
- エ 旦那

問四 空欄〔X〕に当てはまる表現として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 太鼓を抱へて
- イ かはばかまを着て
- ウ さい銭を携へ
- エ 太鼓のばちをもちて
- オ 衣を身にまとひ

問五 傍線部④「へぎに書付立られける」とあるが、一休はなぜこのような行動をとったのか。その理由として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

- ア いつもの調子で旦那に問答をしかけて、旦那がどのような対応をするか見てみようと思ったから。
- イ 和尚のもとに禪を学びにきているというのに、皮のはかまというみすばらしい格好が和尚に失礼だと思ったから。
- ウ 常日ごろ仲良くしている旦那が、皮のはかまで寺に来ることのでんの罰があたることを心配したから。
- エ 皮のはかまを身につけてやってきた憎い旦那を困らせ、どのような反応をするか様子を見ようと思ったから。
- オ 頻繁に寺に来ては学識をひけらかす旦那に対し嫌気がさしており、寺に来てほしくなかったから。

問六 傍線部⑤「此お寺の太鼓は何とし給ふぞ」とあるが、一休は

これに対してどのような反応をしたか。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 寺の太鼓の難点を鋭く指摘され、返す言葉もなくなってしまう。太鼓のばちで旦那をたたいてしまった。

イ 寺の太鼓は仏の許しを得て使用しているものだが、旦那は仏の許しを得ていないため罰が当たると答えた。

ウ 「ばちがあたる」とは書いたが「罰が当たる」とは書いていないといつて旦那のこともばちでたたこうとした。

エ 寺では夜に昼に太鼓をたたいて死んだ動物たちを供養するのだから、旦那にも同じように供養してほしいと答えた。

オ 太鼓はいつもばちを当てられているので、皮のはかまを着たあなたにもばちをあてましょうと答えた。

問七 傍線部⑥「おどけられけり」とあるが、ここには一休のどのような人物像が表れているか。その説明として最もふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 豊かな知恵と、くじけない勇気をあわせ持った人物。

イ 矛盾を指摘されてもなお、怒ることがない心の広い人物。

ウ 利口なだけではなく、ユーモアを兼ね備えた人物。

エ 不利な状況になると、おどけてごまかすような人物。

オ 悪事に対して嫌悪を抱く、強い正義感を持った人物。

四

次の傍線部の漢字の読みをひらがなで答え、カタカナを漢字に改めなさい(楷書できちんと書くこと)。

- (1) 波止場から船を眺める。
- (2) 神社の境内を散策する。
- (3) ミスが頻発する可能性がある。
- (4) 一方に偏重するのは避けたい。
- (5) キゾカいのし過ぎは、かえって失礼だ。
- (6) 千載一グウのチャンスだ。
- (7) キセイ概念にとらわれてはいけない。
- (8) コヨミのうえではもう春となった。







# 高校入試特別講座 国語 I 第4回解答

## 国語解答

- 一 問一 イ 問二 ウ 問三 ア  
 問四 イ 問五 イ 問六 エ  
 問七 イ 問八 オ  
 問九 結論を用意
- 二 問一 A…ア B…ウ C…オ  
 問二 エ 問三 イ 問四 エ  
 問五 A…ウ B…オ

- 三 問一 1 わざわい 2 ようよう  
 問二 オ 問三 エ 問四 イ  
 問五 ア 問六 オ 問七 ウ
- 四 (1) はとば (2) けいだい  
 (3) ひんばつ (4) へんちょう  
 (5) 気遣 (6) 遇 (7) 既成  
 (8) 曆

- 一 [論説文の読解—芸術・文学・言語学的分野—文学] 出典：村上春樹「自己とは何か(あるいはおいしい牡蠣フライの食べ方)」(『村上春樹 雑文集』所収)。

＜本文の概要＞小説家は、多くを観察し、わずかしか判断を下さない。最終的な判断を下すのは常に読者であり、小説家の役割は、下すべき判断を最も魅惑的な形にして読者に手渡すことである。小説家は、仮説を積み重ねていき、読者は、その仮説の集積を自分の中に取り込んで個人的にわかりやすい形に並べ替える。「判断」とは、その個人的な並べ替え作業のことであり、精神の組成パターンの組み替えのサンプルである。読者は、そのサンプリング作業を通じて、生きるという行為に含まれる動性を、我がことのようにリアルに「体験」する。また、小説家は、「自分とは何か?」と考えることはない。自分自身について説明するのはほぼ不可能であるが、何らかの事象・事物と自分自身との間に存在する関係や距離感を書くことは、自分自身について書くことでもある。小説家は、何らかの事象・事物について文章を書き続け、それらの事象・事物と自分自身との間に存在する距離や方向を、データとして積み重ねていく。それにより、「物語」は動き始めるのである。

問一＜接続語＞Ⅰ. 仮に「奄美の黒兎の観察を通してボウリング・ボールの描写をすることになる」としても、「正しい観察のないところ」には「正しい描写」はありえない。Ⅱ. 「精神の組成パターン」を実際に組み替えることなんて、人生の中で何度もできることではないので、「我々はフィクションを通して、まず試験的に仮想的に、組成パターンの「サンプリングをおこなう必要」がある。Ⅲ. もしも「自分の気持ちを理解してもらえたと感じた」としたら、それは「あなたが僕の物語を、自分の中に有効に取り入れることができた」からである。Ⅳ. 「原稿用紙四枚以内で自分自身を」説明しなさいという問いは、「どちらかというの意味のない設問」のように思えるが、そうはいつでも、「自分自身について書くのは不可能であっても、たとえば牡蠣フライについて原稿用紙四枚以内で書くことは可能」である。

問二＜文章内容＞X. 小説家が、自分の存在を強く示すために「自分であれこれものごとの判断を下し始める」と、小説はつまらなくなる。Y. 「自分とは何か?」という問いかけは、小説家にとってはわかりきった問いかけであるため、意味を持たない。Z. 「あなたが牡蠣フライについて書く」ことで、「あなたと牡蠣フライとのあいだ」の互いの関わり合いや距離感が、自動的に表現される。

問三＜文章内容＞読者は、小説家が積み上げた「仮説」を「自分の中にインテイク」し、「自分のオーダーに従ってもう一度個人的にわかりやすかたちに並べ替える」が、それは「精神の組成パターンの組み替えのサンプル」でもある。その「サンプリング作業」を通じて、読者は「生きるという行為に含まれる動性＝ダイナミズムを、我がことのようにリアルに「体験」する。

問四＜文章内容＞もし読者が、小説を読んで「自分の気持ちを理解してもらえたと感じた」とした

ら、それは、読者がその小説を「自分の中に有効に取り入れることができた」からである。読者は、小説家が積み上げた「仮説」を「インテイク」して「並べ替える」が、その作業がうまくいった場合に、読者は小説家に「自分の気持ちを理解してもらえた」と感じるのである。

問五<文章内容>小説家は「仮説」を積み上げるだけであり、読者がその仮説を取り込み、自分のオーダーに従って並べ替えることで初めて、「仮説の行方」は決まるのである。

問六<文章内容>「自分とは何か？」という問いかけを、小説家は「別の総合的なかたち(つまり物語のかたち)に置き換えていくことを日常の仕事にして」いて、「作業はきわめて自然に、本能的に」なされる。そのため、小説家にとっては、「問いそのものについてあえて考える必要もないし、考えてもほとんど何の役にも立たない→むしろ邪魔になる」のである。

問七<文章内容>「牡蠣フライについて書く」ことで、「牡蠣フライとのあいだの相関関係や距離感」が「自動的に表現」される。それは、突き詰めていけば、自分自身について書くことでもある。ある「事象・事物」と「自分自身」との間にある「距離や方向」を、「データとして積み重ねていく」と、「物語というヴィークル(乗り物)が自然に動き始める」のである。

問八<要旨>小説家とは、「多くを観察し、わずかしかな判断を下さないことを生業とする人間」であり(ア…×)、小説家が面倒がって「自分であれこれものごとの判断を下し始める」と、小説は「つまらなく」なる(ウ…×)。小説家は、「仮説をただ丹念に積み重ねていく」のであり、「どれくらい有効に正しく猫=仮説を選びとり、どれくらい自然に巧みにそれを積み上げていけるか」が、「小説家の力量」になる(エ…×)。「判断」とは「精神の組成パターン」の組み替えであるが、精神の組成パターンを実際に組み替えることは、「人生の中で何度もできることではない」ので、我々は「フィクションを通して、まず試験的に仮想的に、そのようなサンプリングをおこなう必要」があるのであり、小説家は、「虚構の中でしか、仮説を有効にコンパクトに積み上げることができないと知っているから」こそ、「どこまでも虚構にこだわる」のである(オ…○)。「自分とは何か？」と長期間にわたって真剣に考え込む作家は、「何冊かの優れた小説を書くかもしれない」が、「本来的な意味での小説家」ではない(イ…×)。

問九<文章内容>小説家が「良い物語を作るため」になすべきことは、「結論を用意することではなく、仮説をただ丹念に積み重ねていくこと」である。「どれくらい有効に正しく猫=仮説を選びとり、どれくらい自然に巧みにそれを積み上げていけるか」が、「小説家の力量」になる。

二 [小説の読解] 出典：堀辰雄「暮砦の家」。

問一<表現>A.「小案内者」は、誰も知らなかった抜け道を見つけてそこへ案内しているので、「得意そうに」どんどんその道へ入っていった。 B.「私たち」は、「先頭のもの」について中に入ったが、入ったとたん、話すのを突然やめてしまった。 C.「とんでもない場所へ来てしまった」と感じていた「私たち」は、「小家」の前を誰にも気づかれないように通り抜けようとした。

問二<文章内容>「私たち」は、寺の境内に侵入すると寺の爺たちに「たちまち追い出されてしまう」のが常だった。この日も、「私たち」は、見つからないように寺の裏の抜け道から奥へ入っていったが、「寺の爺たちに見つかって」しまい、爺たちからひどい目にあわされた。

問三<心情>「私たち」は、寺の境内に侵入すると寺の爺たちに「追い出されてしまう」が、「そうなる」と一層その寺の境内や墓地を荒すことが面白いことのように思われ、爺に見つかるのを恐れながら、それでも決してその中へ侵入することを止めなかった」のだった。この日も、寺の裏に「抜け道」があると聞いたので、「私たち」は、皆好奇心を抱いてそこへ行こうと思った。

問四<心情>「まだ見たこともないような怪奇な庭」が横たわっているのを見て、「私たち」は、「何時の間にかとんでもない場所へ来てしまったような不安な気持」になり、「無言」になった。

問五、A<表現>文章は、全体としては、「私」が自分の少年時代を現在の視点から回想して語る形になっている。ただ、その中で、寺の裏の抜け道から奥へ入っていった場面では、「不意に意外な場所に出たものに見える。～私たちは一層驚かすにはいられなかった。」までは、当時の「私」の視点で語られ、その場の光景がありありと見えるような表現になっている。 B<心情>「私たち」は、寺の裏の抜け道から奥に入っていて目にした光景に驚いて「不安な気持ち」になっていた。しかし、その後「寺の爺たち」に見つかり、爺たちが腹を立てて追いかけてきたので、「私たち」は、「興奮して」しまい、爺たちを「赤鬼」「青鬼」と呼ぶ日常の気分に戻った。

三 [古文の読解—仮名草子] 出典：「一休ばなし」巻ノ一、一。

<現代語訳>一休和尚は、幼いときから、普通の人とは違っておられ、賢く利発であったとか。師匠の坊さんは養叟和尚といわれた。学識のある旦那がいて、いつも(寺に)来て、(養叟)和尚に参禅などなさいましては、小僧一休の利発であることを心地よく思っ、ときどき冗談を言って、問答などをしていた。あるときいつもの旦那が、(皮のはかまを着て)来たのを、一休は門外でちらりと見て、中へ走って入って、へぎに何やら書きつけて立てられたことには、/この寺の内に皮の類(が入ることは)、かたく禁止する。もし皮の物が入るときは、その身に必ずばちが当たるだろう/と書いて(へぎを)置かれた。その旦那はこれを見て、「皮の類にばちが当たるならば、このお寺の唐太鼓は何となさいませうか」と申された。一休はお聞きになられて、「だからですね、夜昼三度ずつばちが当たるので、あなたへも太鼓のばちを当てましょう、皮のはかまをお召しになっているので」とおどけなされた。

問一<歴史的仮名遣い>1. 歴史的仮名遣いの語頭以外にあるハ行は、現代仮名遣いでは原則として「わいうえお」になる。 2. 歴史的仮名遣いの「au」は、現代仮名遣いでは「ou」になる。

問二<古文の内容理解>学識のある旦那と軽妙なやりとりができるように、一休は、頭の回転が速くて賢い小僧である。「発明」には、賢い、利発、という意味がある。

問三<古文の内容理解>「こびたる旦那」は、いつも寺に来て和尚に参禅などし、ときどき一休と冗談を言って問答などしていた。

問四<古文の内容理解>この日、旦那は「皮のはかま」を着ていたもので、それを見た一休は、急いでへぎに、皮の物を寺に持ち込むことを禁ずるということを書いた。

問五<古文の内容理解>一休は、寺の中へ皮の類が入るのは厳禁で、もし皮の物が入った場合はその身に必ずばちが当たるだろう、と書いたへぎを旦那に見せた。旦那は皮のはかまを着ていたもので、こう書いて見せたら旦那はどんな反応をするだろうと一休は思ったのである。

問六<古文の内容理解>一休は、旦那の問いに対して、皮を張った太鼓に「夜昼三度ずつばちあたる」ということを根拠に、皮はかまを着た「其方へも太鼓のばちをあて申さん」と言っている。

問七<古文の内容理解>一休は、旦那が皮のはかまを着て来たのを見てすぐに「若かわの物入る時は、其身にかならずばちあたるべし」と書いた。しかも、この文言では、「罰が当たる」の「ばち」と太鼓の「ばち」が掛けられており、いかにも利発で頭の回転が速い一休の様子がうかがえる。さらに、旦那に、皮のはかまを着ているあなたにもばちを当てよう、などと滑稽なことを言っている。

四 [漢字]

- (1)港の、海に向かって細長く突き出した構造物のこと。 (2)寺社の敷地内のこと。 (3)しきりに起こること。 (4)一方だけを重んじること。 (5)「遣」の音読みは「派遣」などの「ケン」。(6)「千載一遇」は、千年に一度というような、めったにない機会のこと。 (7)すでにできあがっていること。 (8)音読みは「陰曆」などの「レキ」。

